

勇猛果敢かつ柔軟な発想で

北海道開拓をけん引した人

## 黒田清隆

奥田 静夫



(国立国会図書館 所蔵)

### 清隆だからこそ残せた功績

幕末から明治にかけて活躍した黒田清隆（通称了介）は、天保十一年（一八四〇）、禄高四石という下層の薩摩藩士の家に生まれながら、それをバネにして、維新の激動期をたくましく生き抜いた人であった。

彼は、明治三年（一八七〇）以降、同十五年（一八八二）までの間、開拓使（開拓使の「使」は僻地におかれた役所を指したので、「開拓庁」だと理解すればよい）の次官、長官代理、長官などをつとめたので、北海道開拓の功労者として語られることが多い。

事実、開拓使で果たした役割は非常に大きく、しかも彼でなければできなかったであろうことが多い。ここにその例をあげると、

①当時、発足したばかりの新政府（「薩長政府」ともいわれた）内にあつて、清隆は西郷隆盛、大久保利通に次いで「薩摩閥ナンバースリー」の位置にいた。そして明治十年（一八七七）の西南戦争で西郷が自決し、翌年、大久保が暗殺される（紀尾井町事件）と、そのトップに立つ。

したがって、清隆の存在自体がきわめて大きく、開拓政策の立案実行や予算確保などに強力なリーダーシップを発揮した。

②当時、北方、とくに樺太でのロシアの脅威が、わが国の安定に暗い影を落としていた。そこで清隆は、開拓使の次官に発令されると、直ちに樺太の現状を視察し、当時の国力などをも勘案したうえで内政重視、つまり「樺太放棄―北海道開拓優先」路線を打ち出した。

この路線は、彼の献策が受け入れられて政府全体の方

針となり、数年のうちに盟友榎本武揚をロシアに派遣して、ロシアとの間で樺太・千島交換条約を締結する形で、結実している。

③明治四年（一八七二）一月には、アメリカに飛び、同国の大物農務局長（大臣相当）のケプロンを開拓使の顧問として招へいすることに成功した。

そのうえで彼の意見を容れて、従来の発想にとらわれない、国際的な視野での開拓政策やその基となる人材養成を構想し、この年十月に「開拓使十カ年計画」を決定、実行に移している。

④明治七年（一八七四）には「屯田兵」を創設している。この屯田兵は、以後三十年間にわたって北海道に定着し、北方防衛に貢献しただけでなく、三十七兵村・七千三百戸・約四万人の人びとを北海道に入植・定着させる原動力になった。

ただ、彼は、決して開拓使だけに収まるスケールの人物ではなかったのだ。

新政府内にあつて、対ロシア政策以外でも、征韓論、征台論などで独自の主張をもって存在感を發揮したし、明治十五年（一八八二）に開拓使が廃止されたあとも、内閣顧問、農商務大臣などを歴任し、明治二十一年（一八八八）には、伊藤博文のあとを継いで、第二代の内閣

総理大臣にのぼりつめた（彼の総理在任中には、大日本帝国憲法が發布されている）。

また、総理退任後も、逓信大臣、枢密院議長などの要職をつとめてあげている。

### 軍人としての顔も持つ清隆

ところで、清隆の前半生を調べてみると、結局、彼には「二つの顔」があつたのだ、ということにあらためて気付かされる。

つまり、彼には、先にふれたような「政治家ないし行政官」としての顔のほかに、「武人（軍人）、軍略家」としての顔があつたのだ。とくに、青年期から明治十年（一八七七）の西南戦争のころまでは、断然、武人としての活躍の方が光っていたように思う。

筆者がこのことに思い至つたのは、慶応四年（一八六八）一月から一年半あまりにわたつた戊辰戦争が終わつたあとの、清隆の行動を調べていたときである。

清隆は初め、新設されたばかりの外務省に入り、外務権大丞となった。しかし、実は、彼の真の望みは、兵部省に入ることであつたらしく、この人事には不満であつた。

ところが、その後、兵部省の実力者大村益次郎（兵部

大輔・長州)が暗殺される事件が起き、事情は一変した。

清隆は、兵部大丞として、兵部省入りをすることになったのだ。彼は、念願かなって、水を得た魚のごとく、いきいきと活躍した。

しかし、まもなく、上司で大村の後任・前原一誠(長州)と意見が対立し、前原の方が先に辞表を出す、という騒ぎが起こった。このときの清隆の怒りは激しく、その権幕に前原も気圧されたのだろう。

これを見た薩摩の大先輩大久保利通が、二人の間に割って入り、清隆をなだめる一方、彼に創設間もない開拓使に入るよう勧めた。

このことが、清隆のその後の運命を、大きく変えたのである。

## 人情家としての一面

さらに清隆の若いころに目を移してみよう。

清隆は、天保十一年(一八四〇)に鹿児島城下で生まれ、藩校造士館や江戸の江川塾で学んだあと、藩の砲隊に入り、生麦事件や薩英戦争を経験している。

特に文久三年(一八六三)の薩英戦争では、錦江湾における英国艦隊との激しい砲撃戦の結果、藩の砲台のほとんどと藩直営の工場群(集成館)が壊滅的な打撃を受

けたばかりか、鹿児島城下の五百戸にも及ぶ民家や寺社が焼失した。

この戦いで、薩摩藩は今更ながら攘夷の愚かさに気づき、これ以降、欧米とくに英国に接近する方向に大きく舵を切る。清隆自身も深く感じるところがあり、このとき以来、彼は、海外情勢や近代軍事技術などに広く目覚めたのだった。

その後、蛤御門の戦いに参戦したあと「薩長連合」に向けての政治工作に専念。西郷隆盛を補佐して長州と京阪の間を奔走した(長州側では、山県有朋(のちの第三代内閣総理大臣)も同じ目的で活動しており、二人は、互いに意気投合した)。

薩長連合は、慶応元年(一八六五)一月に成立し、清隆は、この成功で大いに自信を深めた。のみならず、このときの経験で政治力・政治工作といったものに目覚め、やや剛毅ながらも、臨機応変で、柔軟な思考を身につけていった。

その後、鳥羽伏見の戦い、長岡城攻防戦(この戦争では、山県有朋と確執を生じ、二人は生涯、ライバルの関係になる)、庄内藩攻略、宮古湾海戦、箱館戦争、西南戦争など多くの戦いに参戦して活躍した。とくに、少数での奇襲戦法、背面攻撃を得意とした。

しかも、注目すべきことに、清隆は突撃一本やりのタ

イプではなく、基本的には国力の充実、民生の安定などを重視する「内治優先主義者、平和主義者」のカラーが強いのだ。

具体的な例をあげよう。

清隆は、越後征討のとき、切れ者河井継之助の指揮する長岡藩とは、和平で決着をはかろうと考えていた。しかし、長州藩との関係などもあつて思うがままに処理できず、結局、戦いには勝利はしたが、多くの犠牲者を出した。

ところが、そのあと山県有朋らと別れ、庄内藩攻めを自ら指揮したときには、寛容・温和な態度で敵に接し、一滴の血も流さず、降伏させているのだ。

また清隆は、箱館戦争でも真摯に降伏を呼びかけたし、戦後も敵の敗将榎本武揚を今後の日本に必要な人材と見て命を賭してまでかばい続け、ついにその助命を勝ち取ったばかりか、開拓使に登用した。

このことでもわかるように、彼は意気に感じる人情家でもあつた。

なお、清隆は、前述したように、開拓長官時代に「屯田兵」を創設し、陸軍中將となってライバルの山県と並び立っている。

## 豪腕さと柔軟さで進めた開拓

ここで、箱館戦争が終わって間もない、混迷期に開拓使をリードした清隆の姿勢・哲学のようなものを、あらためて突き詰めてみると、結局は、勇猛果敢、豪腕―それでいて、一面、政治性を備え、柔軟で寛容でもある―の彼が武人（軍人）時代に培った気質こそが、大きくクローズアップされてくるように思う。

こういう時代であつたがゆえに、清隆にいろいろな批判はある。また、清隆は、大物政治家として東京にすることが多く、そのために道内の現場を預かる配下の開拓使幹部との意思疎通の機会が少なく、摩擦を生じたこともある。しかも、薩摩武士の彼は、一切、いいわけをしたり、書き残したりするタイプではなかつたので、余計、誤解され、批判を増幅している面があるようだ。

しかし、前述した樺太問題の処理、ケプロンの登用などで示した清隆の積極果敢な行動を見る限り、やはり、彼以外の他人がリードしたとすれば、こうはいかなかつたであろう、今のような豊かな北海道の姿は無かつたであろう、と思うのである。

かつて、「文武は、別個のものと考えるべきではない」と言う趣旨のことをいった人がいる。

清隆の例から、現代のわれわれがとかく閉塞感のある現代の殻を打ち破るためのヒントを学ぶとすれば、武―

身体を鍛え、強い精神力を備えたうえで、学問をも修めるといふ、ある意味では遠回りでも平凡だが、実は、きわめて「行なうは難い」結論に落ち着くのではないだろうか。

さらには、禄高四石、という極貧といつていい薩摩藩士の家庭から、刻苦精励し、命を賭して国事に当った清隆のたくましさ、ハングリー精神といったことや、若いときに海外留学の夢を抱きながら、果たし得なかったにもかかわらず、謙虚に努力して、識者・先輩に学び、広い視野・進取の気風と柔軟性を身につけた点にも、学ぶべきものがあるように思うのである。

### 望まれる清隆の再評価

生前の清隆の評価は、残念ながら、決して高いとはいえず、一言でいえば、

「毀誉褒貶あい半ばする人物」

と見られていた、といつても、過言ではないだろう。

こうした見方に大きく影響したのは、剛毅でやや一本気な性格や、西郷隆盛、大久保利通の亡きあと、薩摩閥の領袖であったこと、開拓使に気心の知れた薩摩人を多く登用したこと、清夫人の怪死事件があり、清隆が殺したという風説が流れたこと、酒豪で酒癖が悪いというわ

さがあつたこと、開拓使の廃止前後に官有物払下げ事件が起き、これが政敵の格好の攻撃材料となったことなどの事情によると思われる。

こうした見方が大きく影響してか、清隆について書かれた文献は、割合に少ない。

今後の再評価が望まれるゆえんである。

また、清隆は家庭的には恵まれず、子供や妻を亡くし、たえず心の葛藤を抱えて生きた寂しい人でもあつた。

さらには、運命のいたずらで、西南戦争では崇敬する西郷隆盛を死に追いやる役回りを演じるはめになり、この戦争以降、清隆は一度も故郷鹿児島に帰っていないといわれる。そのうえ翌年、彼が兄とも慕う大久保利通を、暗殺事件で失ったときも、犯人島田一良(元石川県士族)らの斬奸状で見る限り、暗殺の動機には、清隆の清夫人に関する怪聞(清隆が清夫人を殺したといううわさ)のことも絡んでいて、清隆の心の傷は深く、大きかつた。

実際、清隆にとつて、北海道開拓の仕事は、戦争や政争、そして家庭内のことなどで悩み、疲れ切つた清隆を元気づけてくれる場でもあつたに違いない。

また、清隆の家庭の中で、のちに養女となつた百子(清夫人の妹)と、のちに血の結合を果たした榎本家の存在だけが、泉のように心を癒やしてくれたのではないだろうか。

黒田清隆年表

天保一一(一八四〇)一〇月一六日鹿兒島城下で生誕

万延元(一八六〇)薩摩藩砲隊砲手に

安政五(一八五八)薩摩藩主島津斉彬急逝(弟久光が実権を握る)

握る)

文久二(一八六二)久光上洛、生麦事件に際会

文久三(一八六三)薩英戦争に参戦 江川塾入門

元治元(一八六四)蛤御門の戦いに参戦

慶応元(一八六五)薩長連合に奔走

慶応二(一八六六)薩長連合成る 徳川慶喜将軍に

慶応三(一八六七)大政奉還 王政復古の号令

慶応四(一八六八)鳥羽伏見の戦いに参戦 奥羽鎮撫総督参謀に

\* (明治 元)

海戦

明治二(一八六九)箱館戦争に参戦、五稜郭攻撃 榎本武揚

降伏 外務権大丞 兵部大丞 中山清

と結婚

明治三(一八七〇)開拓次官(樺太専務)「一〇月の建議」

明治四(一八七一)渡米 帰国 開拓長官代理 開拓使一〇

カ年計画決定

明治五(一八七二)榎本武揚ら赦免・開拓使に採用

明治六(一八七三)「樺太放棄に関する上書」提出 征韓閣

議 西郷隆盛ら下野

明治七(一八七四)榎本武揚、特命全権公使に(ロシア派遣)

台湾出兵 屯田兵創設 陸軍中将・屯田

憲兵事務総理 参議・開拓長官に

明治八(一八七五)樺太千島交換条約 江華島事件

明治九(一八七六)日韓修好条規(江華条約)をリード

明治一〇(一八七七)西南戦争に参戦(熊本城攻防戦) 西郷隆

盛自刃

明治一一(一八七八)妻清が病死 怪聞流れる 大久保利通暗

殺事件

明治一二(一八八〇)丸山滝子と再婚

明治一四(一八八二)開拓使官有物払下げ事件「明治一四年の

政変」

明治一五(一八八二)内閣顧問 開拓使廃止

明治一七(一八八四)伯爵に

明治二〇(一八八七)農商務大臣に 養女百子、黒木家に嫁ぐ

明治二一(一八八八)第二代内閣総理大臣に

明治二二(一八八九)大日本帝国憲法発布 枢密顧問官に

明治二五(一八九〇)逓信大臣

明治二八(一八九五)枢密院議長に

明治三一(一八九八)娘の梅子が榎本武揚の長男武憲と結婚

明治三三(一九〇〇)八月二三日、清隆逝去(享年五九)